

---

# ポケモンバトルレボリューションOG

黒ぷりん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ポケモンバトルレボリューションOG

### 【Nコード】

N2215H

### 【作者名】

黒ぷりん

### 【あらすじ】

ポケットモンスター、略してポケモン……これはその物語

## プロローグ（前書き）

これはポケモンバトルレポリユーション（以降バトルポ）をもとにした物語です。

一部、マニアックな事やステータス的な表記がされていますが、そこはご勘弁。

戦闘についてはほぼ筆者が体験した出来事を書いております。もしも対戦した事のある方はなんかコメントください。

## プロローグ

紙吹雪と霰が舞い散る舞台に白と黒の巨大な生物が対峙していた。

片方は雪のように白い身体と足まで届く緑の腕を持つ巨人。

そいつが睨みつけているのは黒い翼を持つ凶悪な生物。

そう、ユキノオーとギラティナが対峙しているのだ。

「……………はぁ」

そんな緊迫した場面で、俺は溜め息を漏らした。  
咎める者は居ない。

何故ならこれはモニターの中の世界だからだ。

「まったく、ただ育てた伝説に俺のポケモンが負ける訳が無いだろ？」

ギラティナのシャドーダイブを難なく耐えて、ユキノオーが吹雪を放つ。

効果は抜群……………だが、

「……………やっぱり硬いな」

HP30%くらい残ってしまっ。

「霰ダメージで削つてもまだ残る、なら答えは簡単」

氷の礫を放ち、ギラティナにダメージを蓄積させる。  
相手は単純というかまた同じ技を使う。

離脱技つてのは一見すると強いようにみえるが……

俺は溜め息を漏らし、ポケモンを交換する。  
出てきたのは舌の長いピンクのポケモン。

ベロベルトだ。

「はい無効」

ゴーストはノーマルにはダメージを与えられない。  
ついでに霰のダメージでギラティナが倒れる。

「最近こんな試合だけだな……」

いつものこの時間帯はポケモンを知り尽くした人が多いはずなのだ  
が……

面白い試合も手強い相手も居ない。

殆どが伝説使いという状況なのだ。

「なんか変だな」

それに今は深夜零時。

子供は寝ている時間だ。

そんな事を思いながらランダム対戦の募集を再開する。

しばらくお馴染みの画面が続いていたが、

見つけた

ボソッと呟くような囁きと画面に走るノイズが最初の異変を告げた。

「……………ん？」

しかしそれはすぐに収まり、対戦相手が見つかった。

「……………なんじゃこりゃ!？」

だが対戦相手のメンバーを見て驚愕してしまう。

相手の手持ちにギリティナのオリジンフォルム、シェイミのスカイフォルム、そしてアルセウスが居たからだ。

「バグか? いや、アルセウスは分かるとしてもコイツ等はこのソフトでは対応していないハズ」

このソフトはバトルレポリユーションと言って、プラチナの販売前に発売したソフトなのだ。

故に、フォルムチェンジなどは対応しておらず、まして修正パッチなど公開されていない。

「……………まあいいか、面白そうだし」

そう言ってポケモンを選択しようとした瞬間、画面がブラックアウト

トしてしまっ。

「ちよっおい！　せっかく面白そうな対戦だったのに！」

そう言っって画面を睨みつける。

その時、異変は起こった……

画面が波打ち、中心からなにかカードのような物が現れた。

「……なんだよこれは？」

俺は夢を見ているのだろうか？

一枚のカードがこちらに近付いてきている。

受け取れ、選ばれし者

そしてまた聞こえてきた声……

「いやそんな事言われても……」

そう言いつつも内心ではワクワクしてきている。

この異常な状況でも楽しみを見つける事ができるとは自分でも驚いている。

ゆっくりと手を伸ばし……そして、

「うわっ！」

そしてそのカードを手に取った瞬間、光が溢れ視界を覆う。

時間と空間を操る者を見つけよ

意識が遠のく瞬間、声の主が意味深な事を言った。

「ポケモンバトルレボリューションOG」

だれも知らない物語が密かに始動する……



## プロローグ（後書き）

という事ではじまりましたバトレボOG

今回はプロローグなのであんま書く事が無いね。

……え？

ユキノオーがギラティナの攻撃を耐えるハズが無い？

ご冗談を……うちのユキノオーはHP、防御、特防を重点的に鍛えているので普通に耐えます。

まあ火力が無くなりましたが、コイツの役割はメンバーを守る事が最優先なのです。

オツカ持っているので大文字も耐えちゃいますw

ではまた後書きでお会いしましょう。

「ここは何処だ!？」

眩い光が薄れ、視界が戻る。

「……………つあれ?」

見えたのはお馴染みの俺の部屋。

どこも異常は見当たらない。

「ポケモンの世界に行けるかと思っただけだな……………」

落胆するが、そこで初めて異常に気が付いた。

「アレ? 俺、声が……………」

そう声が高いのだ。

俺は成人して立派な社会人、そんな奴がポケモンしてんじゃねえと言われそうだが、それは問題ない。

声変わりは終わっているし声も低い方だ。

「てかこの服って……………」

立ち上がり辺りを見回しつつ自分の身体を見てみる。

背は低くなったようで、いつもより視界が低い。

そして茶色のジーンズに動きやすそうなシャツ。

手にはグローブ、そして床には靴とカウボーイハットが転がっている。

「……まさか」

そして慌てて部屋を出て、壁に立て掛けていた鏡を見て驚愕する。

「おいおい、マジかよ……」

そこには少年の姿が映っていた。

「俺のバトルパスじゃん……」

バトルパスとは、バトルレボリユーション（以降バトレボ）で使う対戦用の戦士みたいなものだ。

自分の好きな姿を選べ、着せ替えや台詞の変更など色々できる。

「てことは……」

ふと思いつき、腰に手を当てる。

……あつた。

「モンスターボール」

そこにはベルトにセットされている六つの種類が違うモンスターボールが取り付けられていた。

てを触れるとそれに何が入っているのか判った。

「やっぱり最初はコイツだよな！」

ニヤリと笑い、ボールを取り出し投げる。

「出て来い！ ロゼリア！」

ボールから光が飛び出し中から鳴き声と共に小さなポケモンが姿を現す。

「うわぁ！ 本物だ！」

「？」

ロゼリアは意味がわからないといった顔をして小首を傾げる。

「嗚呼っ可愛いなあ」

そう俺はこのロゼリアが一番好きなのだ。  
いや変な意味じゃないぞ。

『どうしたの？』

耳では鳴き声が聞こえるが、頭にメッセージみたいなものが浮かぶ。  
テレパシーみたいなものだろうか？

「ああ、ごめん何でもないよ」

『へんなの』

そう言ってチコチコと辺りを見回すように歩きます。

『じじはどじじ？』

「……？ 俺の家だけ……」

俺が答えるとロゼリアはなにか思い当たるような顔をして、

『じゅじんもえらばれたの？』

俺に尋ねてきた。

「どつやらそうみたいなんだけど……何か知っているのか？」

『うん、すこしなら』

そう言ってロゼリアはこの世界について説明しだした。

ここは現実と仮想空間、つまりポケモンの世界が混ざった世界なのだ。

ここでは生物の時間は停止し、食欲や睡眠などを感じる事が無くなるようだ。

だが最近、何者かがこの世界に干渉し現実世界の者達を引き込むようになった。

ポケモン界でも同様の事件が起こり、事態を重く見た王が俺のようなトレーナーをこの世界に送り込み事態の沈静を託すようになった。

『でも、おうさまのおもいはつうじなかった』

一部のトレーナーは王の依頼を無視して自分勝手にこの世界を楽しむようになったのだ。

なにせ一生どころか永遠に遊んで暮らせるようになるのだ。

戻る意味が無い。

『じゅじんはどつなの？』

「うーん、どうなんだろうね」

この世界はたしかに楽しそうだ。  
それに一生樂できる。

……でも、

「まだこの世界を見てないからな、とりあえず楽しみながら調査してみるよ」

『じゅじんさまらしいね』

クスリと笑いロゼリアは嬉しそうに俺を見つめた。

「あつちの俺もこんな感じなのか？」

『うん』

どうやらあちらの世界の俺もこんな性格なんだろう。  
つまり面白ければすべて良し、面倒は御免。

「まあとりあえず外に出ますか」

床に置いていた帽子を被り、ロゼリアを持ち上げる。

『しゅじゅっ』

「おっ意外と軽い……それに、軟らかい」

『やっやめ』

フニフニと感触を楽しむよう手を動かす。  
ロゼリアは恥ずかしそうに身をよじる。

「真っ赤になって、可愛いなあ」

『いいかげんに、してー!』

目尻に涙を浮かべながらも蒼い薔薇をこちらに向ける。

「あ、マズい」

黒い光が溢れ、顔面にシャドーボールが直撃した。

ここは何処だ！？（後書き）

はい、どうもロゼリアは俺のy（ry

ロゼリアが一番好きなポケモンなんです。

ロズレイド？

アレはフォルムチェンジだろ常考

オリジナルな設定が多数ですが、なんかポケモンの泣き声だけってのはアレだったんでテレパシーで会話できるという設定にしました。

ぶっちゃけそこらへんはノリです。

最後の展開はもう完全な悪乗りですご勘弁。

ではまた後書きでお会いしましょう。



外に出よう！

「いてて……酷い目に遭った」

顎をさすりながら、俺達は外へと出る。

見渡す限りだと自分が居た世界と変わりは無かった。

『おとうさまがみていたらみんちになっていたよ』

右肩に腰掛けているロゼリアが怒ったように答えた。

どうやらちよっとやりすぎたようだな。

「ごめんごめん、でも女の子なんだからあんまり物騒な事は言つもんじゃないよ」

素直に謝ると機嫌を直してくれたようだが、俺と目が合つとプイッと顔を背けてしまう。

ヤレヤレ困った、どんな仕草でも可愛いぞ。

うーむ、どうしてくれよう……

俺がそんなけしからん事を考えていると、遠くからなにか爆発音らしき音が聞こえてきた。

「……なんだ？」

『だれかがたたかっているみたい』

ロゼリアが指した方角に、異様に明るい場所が見えた。  
時折火柱や水柱が飛び交っている。

「行ってみるか？」

『うん』

まあそうだよな、気になるしな。

それに、こちらの世界でのバトルはまだ体験していない。  
どんな戦いなのか見てみるのもいいかもしれないな。

俺達はあの明るい場所へと駆け出した。

数分後。

「ぜえぜえ、着いた……」

恐ろしい事に体力が子供の頃に戻ってしまったようだ。  
昔はインドア派だったんだよ。

そんな事はどうでもいいとして、周囲を見渡した。  
広場みたいな場所で、二人の男女が睨み合っている。

……いや、睨みつけているのは女性の方だけで、男の方は不敵な笑  
みを浮かべていた。

「うーん、遅かったかな？」

『みたいだね』

俺とロゼリアが見ているのはその男女では無く、二人の間。

そこには赤い翼竜が倒れており、その目の前には巨大な亀が仁王立  
ちしている。

リザードンとカメックスだ。

初代ポケモンの最初に貰えるポケモンの最終進化系の二匹でもある。

「この世界だとどんな戦いになるか参考にしたかったんだが……」

『そんなにかわらないとおもっ』

「いやでも指示が筒抜けなんだから読みも何も無い訳で……」

『それならだいたいしょうぶだよ』

「……詳しく聞こうか」

俺達がそんな議論を交わしているうちに、あちらでは深刻な状況に  
なっていた。

「リザードンっ！」

「へへっ俺の勝ちだな！」

女が唇を噛み締め男を睨みつける。

「これでお前の手持ちは全滅」

カメックスをボールに戻し、ゆっくりと女に近付いていく。

「……っ！」

女が身を強張らせる。

いったい何を恐れているのだろうか？

「つまり守ってくれるポケモンも居ない」

「こっ来ないでー!!」

後退りするも後ろは行き止まり、男との距離がほぼ零になる。  
そして肩の手を置き……

「お楽しみはクマジかよ!! それはすげーな!!」

『しゅじゅん……』

空気が読めない俺は大声を出してしまった。

「……………」×4

しばし静寂が支配する。

「おっおいテメエ！　いつからそこに居た！」

会話が断たれた事に腹を立てたのか、男が俺に向かって声を張り上げた。

とういより今気がついたのか？

「いつからって……………ロゼ？」

『しらない』

俺の次の言葉を先読みしたのだろう、ロゼリアが即答する。

「いい雰囲気邪魔しやがって……………下りて来い！　ぶちのめしてやる！」

「きゃっ！」

女を突き飛ばし俺に向かって叫ぶ。

そんな男の姿に俺は少しイラついていた。

「あんたさ、いい雰囲気とか言っているけどそれって間違ってるよ？」

「餓鬼がつ！ ウザいんだよ！ つかロゼリアとか使っている時点で雑魚だから！」

「……………あ？」

「……………」

その一言が限界だった。

俺の空気が変わった事に反応したのか、ロゼリアが黙り込む。所謂、本気モードといった感じだろうか？

ともかく久しぶりの対戦で高揚感が増えてゆく

「久しぶりに面白い対戦ができると思ったんだけどな……………」

ゆっくりと階段を下りて帽子を深く被る。

「最初の相手がこんな奴とはね……………」

「はつなに言っただよ？」

男はそれに答えるかのように、ボールをこちらに向ける。

「バトルルールは3対3のシングル！ 先に二体倒した方の勝ちだ！」

「ああ、いいぜ」

俺はそう答え静かに相手の行動を窺う。

「軽く潰してやれ！ バンギラス！」

「ロゼリア、行ってくれるな？」

『……………うん』

思わぬ状況でこの世界に来て始めての対戦が始まった。  
まあ始まってしまったものはしょうがない。

……………楽しみですかね。

外に出よう！（後書き）

主人公、沸点低いよ（汗）  
ともかく次はバトルです。

色々展開が速いのは仕様です。

あとこの世界の設定諸々はバトル後とします。  
バトルシーンではまとめて一気に書くのが良さそうなんで説明とかは殆ど書かないつもりです。

ではここで少しおさらい。

現在の主人公の手持ち。

ロゼリア、残り不明

ロゼリアの言葉はすべて平仮名表記。

主人公は沸点が低い（笑）

こんな感じですかね。

ではまた後書きでお会いしましょう。



## 初勝負

巨大な恐竜のようなポケモン……バンギラスがロゼリアの前に立ち  
はだかる。

そしてバトルフィールドとなった広場には砂嵐が吹き荒れる。  
バンギラスの特性「すなおこし」が発動したのだ。

……砂パか？

ともかく、相手の次の手を読まないとな。

「はははっ 最初の勝負はもらったな！」

男が笑いながらバンギラスに指示を出す。

引かないという事は何か策があるのだろうか？

たしかに砂嵐状態だと岩タイプの特防は上昇するが……

「バンギラス！ ストーンエッジ！」

バンギラスが吼え、身体に力を込める。

「遅いつ！」

しかし既に俺のロゼリアはバンギラスの懐へと潜り込んでいた。

「なっ！」

男が何かを言おうとした瞬間……

「いまだ！ ロゼリア！」

『きえなさい！』

ロゼリアが右手を掲げ高らかに必滅の呪文を唱える。

『リーフストーム！！』

ロゼリアが唱えた瞬間、彼女の中心から新緑に輝く竜巻が発生し、バンギラスを巻き込んでゆく。

その一撃は凄まじく周囲の瓦礫や壁を吹き飛ばしてゆく。

「……………ロゼリア」

俺は戦いを忘れ、しばらくロゼリアにみとれていた。

竜巻の中、彼女は踊りを堪能している。

それはまるで葉が舞い踊る円状の舞台で踊る彼女の姿を連想できた。

「綺麗だな……………」

そして竜巻が収まると同時に、お辞儀をするロゼリア。

その数秒後、天高く飛ばされたバンギラスが落下し轟音を立てた。不意打ち気味に決まったリーフストームで瀕死になっている。

「なんだと……………」

男が動揺している。

まあそうだよな、普通は耐久型にしての状態異常が基本だ。だが俺のロゼリアは特攻と素早さを強化したアタッカー。

DPで進化できるようになったとしても、元々は無進化組み。そもそも、ミュウやシェイミと同じくらいの特攻なのだ。

砂嵐で特防が上がったとしても弱点ならば一撃は間違いない。まあバンギラスに気合の襷を持たせていないのが敗因でもあるが……

「ロゼリアだと甘く見て油断したな？」

俺はある事を思いつき、男を更に追い詰めるように言葉を放つ。

「なんだと……」

「奇襲は戦略の基本、アンタ何年ポケモンやってんだよ？」

ついでに挑発しておく。

「言わせておけばっ！！」

男は激昂し、バンギラスを戻し叩きつけるように新しいボールを投げける。

「ぶちのめせ！ ポーマンダ！」

さて、これからが重要だ。

選択肢は二つ。

「ボーマンダ！」

「戻れロゼリア」

男が指示を出す直前にロゼリアをボールに戻し、すぐさまボールを投げる。

「げきりん……！」

男はそれでも構わず指示を出す。現れたポケモンを見て自分の失策を呪う。

ダークボールから現れたのは、鋼色の蛇のようなポケモン。

「出て来いハガネール！」

『あいよー！』

賭けは俺の勝ちのようだ。

ボーマンダの渾身のげきりんを受けてもハガネールは涼しい顔をしている。

一応、大文字だったらどうしようかと思ってたんだぞ。

『こんなものかい？』

ボーマンダを挑発するようにニヤリと不的な笑みを浮かべるハガネール。

そんなハガネールの姿を見て怒りの咆哮をあげ、突進してくるボーマンダ。

げきりんは確かに強力な技だ。  
だが同時にリスクがある。  
げきりん発動中はトレーナーの指示を無視するのだ。

そして交換も出来ないこの状況だと、相性の悪いポケモンを出すことでチャンスに変える事ができる。  
その前に竜の舞とかされたら状況が変わるのだが……

「第二撃を受けたらのろい！」

『りょーかい』

二撃目も軽く受け止め、のろいを積む。  
ハガネールののろいはゴーストタイプとは異なり、素早さが遅くなる代わりに攻撃と防御が上昇するのだ。  
素早さが遅くなるのはデメリットに見えるが……

「さて、覚悟はいいかい？」

ニヤリと口の端を吊り上げ俺は目の前の男に問いかける。

「ぐっ！ テメエ！」

男は歯を食いしばり、俺達を睨み付ける。

「ハガネール！ ジャイロボール！」

『アタシの一撃は重いよ？』

俺の言葉に答えるかのように、ハガネールが前転を繰り返してその場で高速回転をする。ポーマンダが構わずに突進してくるが、その回転に弾かれ体勢を崩す。

『潰れな!』

その瞬間を狙い、ハガネールという鋼の弾丸が打ち出されポーマンダを吹き飛ばす。

ジャイロボールは相手が早いほど威力が増す技。

それに加えてハガネールは素早さが下がっているのだ、当然ポーマンダは瀕死になった。

「げきりんで相手の行動を制限してのろいを狙うなんて……」  
しばらく静観していた女性が口を開いた。

『ふう、いつちよ上がり!』

「さすが重量級!」

俺が一仕事を終えたハガネールに声をかける。

だが声をかけられたハガネールは機嫌が悪そうだ。

『あのさ、一応アタシも女なんだよ?』

「ゴメンゴメン! だって見た目がゴツイからつくええ」

『なんだってえ?!』

重量級とゴツイという言葉はハガネールにとって禁句だったようだ。鋼の尻尾で締め付けられる。

「ぐうつちよつ待て、落ち着け」

『いや許さないよ!』

しっ死ぬ!

マジで死ぬ!

「なんなのあの子……」

奇襲からの綺麗な展開。

子供とは思えない戦略的な思考。

「もしかして……外から来た子供?」

呆然と呟く女性。

しかし、俺を含め女性の言葉に答えられるのは誰も居なかったりする。てかいつまで締め付けるのだろうか?

## 初勝負（後書き）

まず始めに、俺TUEEEでごめんなさい（汗）

ちよつと前まではロゼリアが活躍できていたパターンを再現させていただきました。

少し前にニコニコ動画のほうに紹介させていただいてからは微妙に型バレしてあまり活躍できていないというのが現状でもあります。

それでも得意なポケモンには有利に戦えるので問題ないんですがね。

そして今回オチ担当のハガネール。

姉御肌なお姉さまですw

物理技には強いのですが、特殊技には恐ろしく弱いのが特徴です。

ダークボールなのは捕まえやすかったからです。

けして某喋るハガネールの真似事ではありません。

ではではまた後書きでお会いしましょう。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2215h/>

---

ポケモンバトルレボリューションOG

2010年10月10日18時15分発行